

金色のボタン

小川未明

青空文庫

ゆり子^こちゃんは、外^{そと}へ出^でたけれど、だれも遊^{あそ}んでいませんでした。

「みんな、どうしたんだろう。」と、往^{おう}来^{らい}の上^{うえ}をあちらこちら見^みまわしていました。けれど、一^{ひとり}人^{ひと}の子^こ供^{ども}の影^{かげ}も見^みえませんでした。

そのうち、ポン、ポンと、うちわ太^{だい}鼓^こをたたいて、げたのはいれのおじいさんが、小^{ちい}さな車^{くるま}を引^ひきながら、横^{よこ}町^{ちやう}から出^でてきました。そして、ゆり子^こちゃんの立^たつている前^{まえ}を通^{とお}って、あちらへいってしまいました。

つばめが、ピイチク、ピイチク、鳴^ないて、まぶしい大^{おお}空^{ぞら}を飛^と

んでいます。

ゆり子ちゃんはいつもみんなが遊んでいる、お宮の前へいつてみようと、お湯屋の前を過ぎて、広い道を歩いていきました。

このとき、ぴかりとなにか土の上で、光っているものが目にはいりました。

「おや、なんだろう。」と、ゆり子ちゃんは、その方へ走つていききました。

金色のまるいものが、道の上に落ちていました。ゆり子ちゃんは、それを拾つて、小さな手で土を落としてみると、通りかかった、知らないおばさんが、

「お嬢ちゃん、なにを拾いました。ちよつとお見せなさい、金の

指輪ゆびわでないこと。」と、そばへ寄よってきて、ゆり子こちゃんの手ての中なかをのぞきました。

「おばさん、こんなのよ。」と、ゆり子こちゃんは、光ひかるものを見みせました。

「ああ、ボタンですか。ほほほ。」と、笑わらって、そのおばさんは、さつさといつてしまいました。

ゆり子こちゃんは、しばらく立たって、その菊きくの花はなのような、模も樣ようのついている、金きん色いろのボタンをながめていましたが、見みれば、見みるほどもぐずらしくなってきました。

「おまわりさんに、とどけなくていいかしらん。」

そんなことを考かんががているところへ、仲なかよしの正しょうちゃんうが、あち

らから飛んできました。

「ゆり子ちゃん、なにしているの。」

「しょう
正ちゃんは、すぐに、ゆり子ちゃんの持つているものを見つ
けました。」

「金ボタンだね、きれいだな。僕におくれよ。僕、勲章のよ
うに胸につけるのだから。」と、いいました。

「おまわりさんに、とどけなくていいか、私おうちへいつてきい
てみるわ。」と、ゆり子ちゃんが、いいました。

「とどけなくていいんだよ。これは、ほんとうの金じゃないんだ
もの。ただのボタンじゃないか。」と、正ちゃんは、しつかり握
つて、放そうとしませんでした。

おとなしいゆり子ちゃんは、いやといえませんでした。そして、困ったように、正ちゃんの顔を見ていました。

「ゆり子ちゃん、おくれね。」と、正ちゃんは、無理にもほしいのであります。

しかたなく、ゆり子ちゃんは、だまつたままうなずきました。

正ちゃんは、金色のボタンを自分の胸のあたりへつけて、勲章のつもりで、大股に歩きました。

「ゆり子ちゃん、おいでよ。原っぱの方へいつてみよう。」と、正ちゃんは、いいました。いままで、たった一人でさびしかったゆり子ちゃんは、急に、お友だちができて、うれしくなりました。そして、自分の拾った、大事なボタンだけれど、正ちゃんにやつ

でも、惜おしくないように思おもいました。

原はらつばでは、二人ふたりよりも大おおきい、清せいちゃんと、光こう一いちさんとが、
とんぼを捕とつて遊あそんでいましたが、正しょうちゃんが、光ひかつたものを胸むね
におしつけて、歩あるいているのを見みると、

「正しょうちゃん、そのぴかぴか、光ひかるものなあに。」といつて、真まつ
先さきに清せいちゃんが、かけてきました。

「ゆり子こちゃんから、もらったんだよ。」

「ちよつと、お見みせよ。」

「僕ぼく、大だい事じなんだもの。」と、正しょうちゃんは、かくそうとしました。

「とりはしないからさ、ちよつとお見みせよ。」と、清せいちゃんが、
いいました。

「しょうちゃん、しかたなく、そのボタンを清ちゃんの手に渡しました。」

「なあんだ、ボタンじゃないか。」と、清二がつまらなそうに、いいました。

「どこのボタンだろうな、洋服についていたんだね。花の形か、いや、車の形かな。」と、光一もやってきて、頭をかきあげていました。

「清ちゃん、このボタン知らない。」

「知らない。しょうちゃん、道に落ちているのを拾ったんだろう。」と、清二が、聞きました。

「ゆり子ちゃんに、もらったんだよ。」

清二は、にやりと笑って、こんどは、ゆり子ちゃんの顔を見ました。

「ゆり子ちゃん、拾ったのだろう。」

ゆり子ちゃんは、うなずきました。すると、清二は、

「道に落ちているものなんか、拾うものじゃないよ。きたないから。」

そういつて、ボタンを高く空に向かって投げました。

「あつ。」と、正ちゃんは、おどろいて叫びました。そして、上を見ていると、そのまま見えなくなってしまうました。

「あれ、どこへいったらう。」

清ちゃんも、あわてました。ボタンは、どこへ落ちたか、音も

しなかつたのです。

「清ちゃん、返しておくれよ。」と、正ちゃんは、目にいつぱい涙をためていました。

「ほんとうに、どこへいったらう。」

「遠くへ行って、草の中へ落ちたのだらう。」と、光一がいました。

「正ちゃん、かんにんしてね。僕、とんぼを捕ったらあげるから。」と、清二は、あやまりました。

ゆり子ちゃんは、正ちゃんをかわいそうに思いました。二人は、手をつなぎ合つて、さびしそうに帰つたのであります。

それから、五、六日もたつてからです。ある日、ゆり子ちゃん

は、お母さんかあにつれられて、省線電車しょうせんでんしゃに乗のっていました。ゆり子こちゃんちゃんは、赤い帽子あかぼうしをかぶつて、赤いマントあかを着きて、絵本えほんを見みていました。すると、どこから乗のつたのか、支那しなの男おとこの子こが、ゆり子こちゃんちゃんと並ならんで腰こしをかけていました。その子こは、年もゆり子こちゃんちゃんと同じおなくらいで、お父さんとうにつれられて、どこかへいくのでした。おかしいのは、その子こは、黒い帽子くろぼうしをかぶつて、黒いマントくろを着きて黒いくろぴかぴかするくつをはいてるのであります。

電車でんしゃに乗のっている、ほかの人ひとたちが、二人ふたりの子供こどもを見みくらべて笑わらっていました。支那しなの子こは、だんだんゆり子こちゃんちゃんの見みている絵本えほんをのぞきました。そして、わからない言葉ことばで、ゆり子こちゃんちゃんに話はなしかけたのです。

「なあに、お母さん。」と、ゆり子ちゃんは、支那の子供の言葉
がわからないので、お母さんにたずねました。

「そのご本をかしておあげなさい。」と、お母さんはやさしく、
おっしゃいました。

ゆり子ちゃんが、絵本をかしてあげると、支那の子のお父さん
が、こちらを向いて頭を下げました。そのうちに、電車が、つ
ぎの駅へ着くと、支那の子は、ご本をゆり子ちゃんに返して、笑
って、こちらをふり向きながら降りていきました。

「お母さん、あの子、かわいらしい子ね。」

「ちようど、正ちゃんくらいですね。」

「あの子のお家はどこなの。」

「さあ、どこでしょう。お母さんにはわかりませんわ。」

ゆり子ちゃんは、ほんやりと考えていました。

「このご本、あげればよかった。」と、ゆり子ちゃんはいいました。

「見せてあげれば、いいのですよ。」

お母さんは、自分も子供の時分、人なつこかつたことを思い出しました。どうかこの子が、いい人間になるようにと、心で祈っていました。

「おばあさん、しっかりおつかまんなさい。」

黒い洋服を着たおじさんが、腰のまがったおばあさんの降りようとするのをしんせつに世話していました。

「やさしい、いいおじさんだ。」と、ゆり子こちゃんは、思おもつて、目めをぱつちりあげて見みました。ゆり子こちゃんは、はつとしたのです。おじさんの洋服ようふくの、金色きんいろのボタンが、いつか往おう来らいで、自分じぶんの拾ひろったのと同おなじだからです。

「まあ、ほんとうに不思議ふしぎだわ。おんなじボタンだわ。」

ゆり子こちゃんは、もう二度どと見みられないと思おもつたのを見みたので、飛とび上あがるよううれしい気きがしました。さつそくお母かあさんに、なんのボタンかと聞きいたのです。

「あのおじさんは、鉄道てつどうへつとめていらつしやるのよ。あのボタンのしるしは、車くるまの輪わですよ。」

「菊きくの花はなじゃないの。」

「いいえ、車の輪なんです。」

ゆり子ちゃんは、鉄道のおじさんが、おばあさんをしんせつにしてやったのに感心しました。このことを正ちゃんにあつたとき、知らしてやろうと思ひました。正ちゃんは、まだ、鉄道のおじさんの洋服のボタンを見たことがないと思ひました。清ちゃんも、光ちゃんも、まだ知つていなかったのでしよう。ゆり子ちゃんは、みんなに、今日の話をして、教えてあげようと思ひました。

「鉄道につとめているおじさんが、道で落としたんだわ。あのボタンを停車場へ持つていつて、とどけてあげればよかつた。」と、ゆり子ちゃんは思つたのです。

そのうち電車でんしゃが、自分じぶんたちの降りおる駅えきへついたので、ゆり子こちゃんはお母かあさんに、手てを引ひかれて降りおりました。

この日ひ、ゆり子こちゃんは、いろいろのいいことを知しったのであ
りました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「夜の進軍喇叭」アルス

1940（昭和15）年4月

※表題は底本では、「金色《きんいろ》のボタン」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

金色のボタン

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>